

れている。

そこで、本論文では、第一にEngelsberg-Schriefferの方法に従い伝導電子1体Green関数を計算し、結晶場を2準位で近似した系における伝導電子の状態を調べた。この時、フェルミエネルギーから測った伝導電子のエネルギーが結晶場2準位間のエネルギー差 Δ に近いとき、伝導電子とf電子の相関が強くなり電子の準粒子としての描像が成り立たなくなる。また、伝導電子のエネルギーが Δ より十分大きければ自由電子的であり、 Δ より小さければ結晶場準位の励起を常に伴いながら動く準粒子的状態となることが分かる。第二に、s-f交換相互作用の2次迄のself energyを用いてPr金属及びPrNi₅合金に対し、比熱の磁場効果を調べた。このとき、Pr金属においては、磁場をC軸に平行にかけたとき γ は増大し、C軸に垂直な場合は減少した。またPrNi₅においては磁場をC軸に垂直にかけたとき結晶場の基底状態と励起状態のクロスが生じる。このためこの付近で著しい γ の増大がみられる。しかしながらこの磁場領域では、核準位によるSchottky比熱の高温側の T^{-2} に比例した裾と結晶場準位によるSchottky比熱の低温側の裾に被われ、s-f相互作用による効果は実際には見えない。第三に、s-f相互作用の高次の効果について調べた。この時、伝導電子Green関数に対する高次補正は比熱には効かない。しかし、f電子の帯磁率に対する、bubble近似での補正は比熱に大きな寄与をもたらし、またその磁場変化は激しくなる。

2. ストレートチャンネル中の第4音波

金 尾 憲 一

第4音波はスーパーリーク中の超流動ヘリウムを伝わる圧力波である。二流体モデルによれば超流動密度は第4音波の音速の二乗に充分よい近似で比例することがわかっている。すなわち音速測定から超流動密度の振舞いを知ることができる。今回の実験の目的は第4音波を用いて超流動³Heのバルクの超流動密度を測ることである。

従来の実験ではスーパーリークは微粒子を容器に詰め込んでつくっていたが粒径にばらつきがあるため場所によってはオーダーパラメーターが壁近傍で抑えられる効果を見逃す可能性がある。さらにチャンネルの長さは一意的には決まらず平均化されたものを見ている。そこで今回はフォトリソグラフの手法を用いて矩形の断面を持つ真っすぐなチャンネルのスーパーリークを作製した。幅 70 μm 、高さ 2.7 μm 、長さ 28.2 mm のチャンネルが横に 80 本並んだものとなっている。音波を励起、検知するトランスデューサーは容量変換型でチャンネルの両端部に配置される。このセルの特徴はトランスデューサーの振動面が音波の伝播方向と垂直になっている点である。これはスーパーリークが何層も積み重ねられないという制限から考案した。

⁴Heでテストした結果、気体、常流体、超流体といった流体力学的変化を反映する音波セルができたことがわかった。

今後は音波の測定が行えるセルを開発し³Heでの実験へ移行する計画である。